

日本品質管理学会の活動について



東京理科大学 教授
鈴木 知道

昨年秋に副会長を仰せつかりました、東京理科大学の鈴木知道です。日本品質管理学会は博士の学生の時に入会しました。当時は、学会への入会目的ははっきりとは意識していませんでしたが、研究会での発表及び論文投稿が主であったことは間違いありません。品質管理学会の会員を大きく分けた「産」と「学」のうち、学のメンバーとして発表の場を求めています。

学会との関わり方が大きく変わったのが、2008年からです。2009年のANQ(アジア品質ネットワーク)の東京大会開催のため、国際委員会の担当になり、理事会に出席するようになりました。理事会では、多くの「産」の方と接することができ、企業の方々がどのような視点で学会に参加しているかを多く知ることができました。業務で使える知識や手法の習得、及び、他企業と同職種の方々とのネットワーク作り、が主な参加目的であることを感じました。

会員が学会に求めているもの、言い換えれば、学会が会員に提供できるもの、に対して今後の可能性を考えてみたいです。これらを、自分が携わったことのある行事(本部)、国際化、論文誌の観点から述べていきます。さきほど「産」「学」という言い方をしましたが、学の会員の方々も人との広がりが増やしたいでしょうし、いろいろな現場も知りたいでしょう。産の会員の方々も自分たちの改善事例や困りごとを発表して意見をもらいたいです。この点については産だから学だからということはなく、この垣根はなくなっていくのが望ましいです。

学会として、一番大きな行事は、年次大会と研究

発表会でしょう。毎年、多くの参加をいただいておりますが、もっと増やしたい、特に発表数を増やしたい。発表数を増やすにはどうすればよいか、簡単な答えはないと思いますが、発表するインセンティブが増えるような状況にしたいです。また、発表会以外のイベント、春の研究発表会ではチュートリアルセッションを、秋の年次大会では事業所見学会を実施していますが、他のイベントも考えてみたいです。

国際学会としてのANQ Congressですが、2002年の東京での旗揚げ以降、毎年開催されています。JSQCとして、このような場がしっかりと継続されるよう、ANQの支援をしっかりとしていくことが大事であると考えます。ANQ Congressは若手の学の研究者の発表の場としては、かなり成果を挙げていると感じますが、JSQCの産からの発表がもっと増えて欲しいところです。海外からは多くの産からの発表があります。是非ご検討ください！

もう一つ大きな項目が論文誌です。昨今、大学の評価も国際的になってきました。教員や研究者の評価の最重要項目が論文であり、個人としても大学としても論文掲載数および被引用数が数えられます。その結果、必然的にインパクトファクターが高い英語論文誌への投稿を目指すこととなります。「品質」誌の査読のレベルは高く、質のよい論文が掲載されていると思いますが、労多くして功少なしという状態になってしまっています。オープンな英文論文誌の創設が期待されます。

以上の案を少しでも実現し、学会の活性化につながればと考えています。